

呼吸器内科入局を 考えている方へ

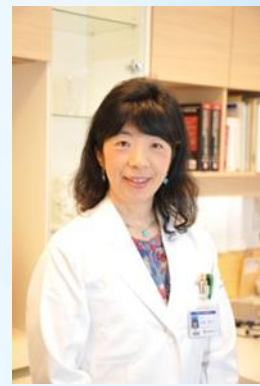


Keio University



慶應義塾大学医学部呼吸器内科

スタッフからの挨拶



教授
別役 智子

私は「呼吸器の臨床と研究を両輪のごとく」教室作りを進めていきたいと考えております。

呼吸器内科診療は内科診療全体における主軸の一つです。

さらに呼吸器疾患はアレルギー性疾患、炎症性疾患、感染症、腫瘍と領域が広いことが特徴で、医師として大変やりがいに満ちた分野です。内科研修修了後、当科では呼吸器内科専門医、アレルギー専門医、感染症専門医、臨床腫瘍専門医、気管支鏡専門医などの取得が可能です。

世界に通用するレベルの知識、経験、技術を持った呼吸器内科医を育成するため、ハード面、ソフト面でも教育プログラムをさらに充実させていきます。研究面での活動も旺盛で、気管支喘息、急性肺損傷、肺感染症、肺癌、慢性閉塞性肺疾患（COPD）などの疾患分野で世界一流の研究が行われています。

国際的学会活動、共同研究も積極的に進め、ハーバード大学、カリフォルニア大学、ワシントン大学、ピッツバーグ大学をなど海外の研究室に留学するチャンスも与えています。

私たちの目標は慶應大学医学部呼吸器内科発のオリジナルで質の高い「臨床に基づく研究」の成果を世界に発信し続けることです。自分たちの研究の成果が、必ずいつか呼吸器の病に苦しむ人の救いになることを信じ、日々実験を続けています。

私は当教室のリーダーになるにあたり、組織（教室）のために人がいるのではなく、人のためにこそ組織（教室）があるべきだと考えています。当教室のミッションは、病んでいる人に最良の医療を提供すること、人を育てることに努力を惜しまないこと、そして、ここで仕事をすすべての人が毎日笑顔で仕事ができることです。多くの方が私たち呼吸器内科の仲間になってくれることを希望しています。

スタッフからの挨拶



講師

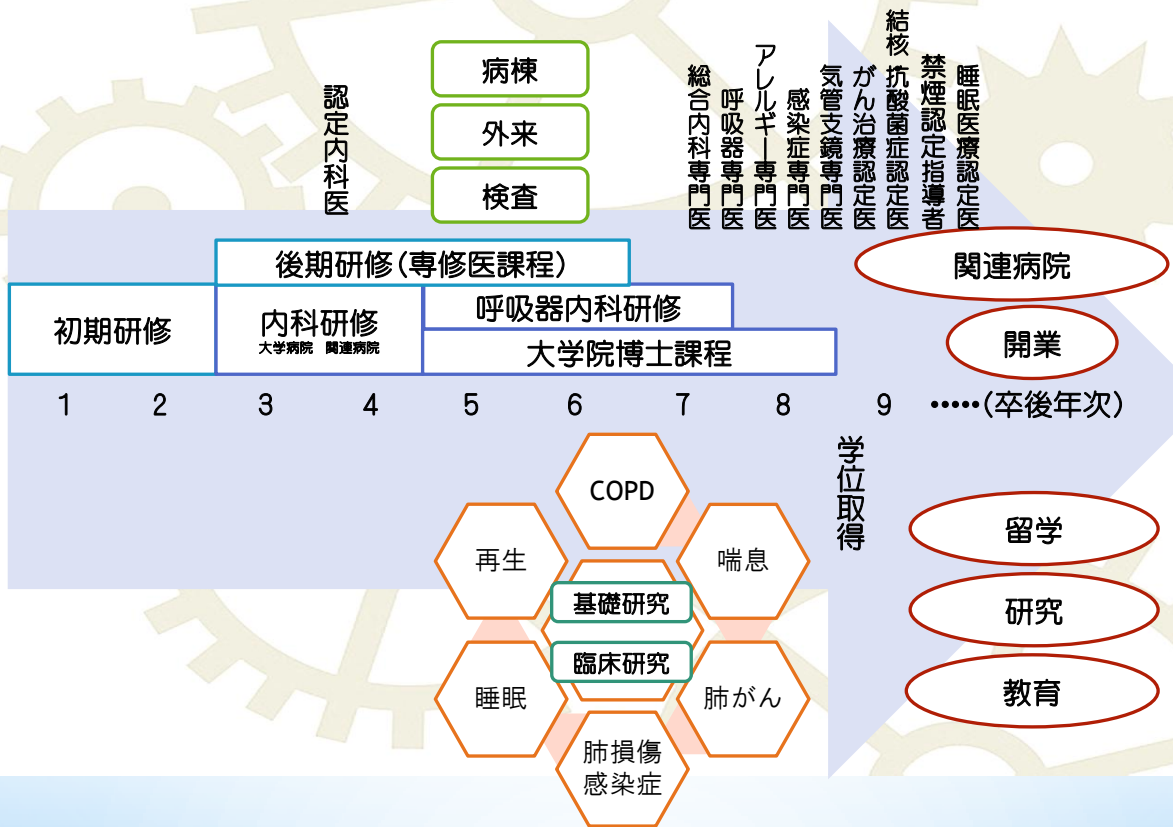
田坂 定智

呼吸器内科は肺をテーマとしていますが、悪性腫瘍、感染症、自己免疫疾患など多彩な疾患を扱います。また画像診断や病理、呼吸機能など疾患・病態を多角的に捉えることが求められるうえ、内視鏡や呼吸管理などの修得も必要とされる奥の深い分野です。と言うと身構えてしまうかも知れませんが、慶應の呼吸器内科では誰でも楽しく呼吸器病学を学び、専門医を取得できるようなプログラムを準備しています。

呼吸器内科には他大学出身者や女性医師も多く、活気にあふれています。また慶應以外で研修をされた、あるいはしている先生には、それに合わせた career development を考えます。

このページをみて興味を持っていただいた先生、学生さん、いつでも私までご連絡いただければ幸いです。一緒に仕事をすることを楽しみにしています。

キャリアパス



卒後3年目に内科に入局して、内科研修終了後の5年目に呼吸器内科に入局します。大学院への入学は卒後4年目または5年目が多いです。大学で数年間、研究および臨床に従事します。海外留学する人も多数います。呼吸器内科専門医をはじめ関連領域の専門医が取得可能です。

他病院で後期研修終了後での入局を考えている方なども相談しますのでぜひご連絡いただければと思います。

Q & A

- ・ 研究グループはどのように決まりますか？

教授と話し合いを持って決定します。自分の興味や希望が考慮されます。

- ・ 他大学出身者はいますか？

入局者の約1/3が慶應義塾大学以外の出身者です。また、初期臨床研修を慶應義塾大学病院以外で行った者が多数を占めます。

- ・ 手技はできますか？

気管支鏡は若手医局員が中心となって行います。超音波気管支鏡下穿刺吸引生検法（EBUS-TBNA）の習得も可能です。胸腔穿刺、胸腔ドレーン留置はその施行だけでなく、呼吸器内科をローテーションしてくる研修医・専修医への指導も担当します。3年間の研修で呼吸器専門医・気管支鏡専門医取得の申請に必要な手技は習得・経験可能です。

- ・ カンファレンスはどのような内容ですか？

病棟の症例を取り上げた臨床カンファレンス、医局員による持ち回りの臨床レクチャー、外科や病理診断部とともに症例をディスカッションする肺病理カンファレンスなどを順番に毎週行っております。外部からの講師を招いての特別講義が行われることもあります。

週間予定

1週間の主要なスケジュールとしては病棟業務に加えて、病棟カンファレンス、症例カンファレンス、気管支鏡検査、外来、外勤などがあります。

呼吸器内科当直業務は約2回/月です。

上級学年になると週1コマの大学病院呼吸器内科外来を担当することもあります。病棟で担当した患者のフォローの他、他院からの紹介患者のマネジメントを学ぶ機会となります。



カンファレンスでは若手医師も多く発言し、診断および治療に関して各専門の先生から多くのアドバイスを聞くことができます。

若手医局員の声

平成25年度入局（大学院1年）

大芦 彩野 （北海道大学医学部 平成20年卒）



私は北海道大学医学部を卒業後、都内の大規模な市中病院で初期研修2年を修了し、同じ病院で呼吸器内科専門の後期研修を行いました。3年間の研修期間も終了に近づいた時、自分がどのような医師像を目指すのかについての悩みが出て来ました。

どのような規模の病院で働くか？地域の中核病院か？呼吸器内科が1～2人しかいないような病院か？それとも癌センターなど目指す分野の専門病院でさらに厳しい研修を積むのか？などです。

また、以前より基礎研究と大学院進学にも興味があり、それらに挑戦するならば年齢・キャリア的にも最後のチャンスでした。しかし、いまさら大学病院に属することが可能なのか？ということでも悩んでいました。

そんなある日、母校の大先輩である別役教授にお話を伺う機会がありました。教授の「アカデミックな医師像をまだあきらめたくないのなら、大学院へ来てはどうか。臨床を経験してきた者の視点が研究に役立つこともあるだろうし、研究の経験が実臨床にフィードバックされることも多いだろう」とのお言葉に、まさしく我が意を得たりとばかりに、入局と大学院進学を決意しました。

慶應とは縁もゆかりもなかった異色の出自である私ですが、呼吸器内科の皆様は優しく迎えて下さり、密かに心配していたような他大学出身者に対する分け隔てなど全くなく、楽しい同期と尊敬する先輩方に恵まれ充実した日々を送っています。カンファレンスでの活発な議論に自分の視野の偏狭さに気づかされたりすることが多くあります。また、1-2年上の先輩方のupdateされた研究内容発表に大変刺激を受けます。「同じ呼吸器内科の仲間として互いに高め合い、ともに科を盛り立てていこう」というあたたかな雰囲気にも包まれた、働きやすい職場だと思います。

若手医局員の声

平成24年度入局（大学院2年）

持丸 貴生（慶應義塾大学医学部 平成20年卒）



私は平成20年に慶應義塾大学医学部を卒業し、現在は卒後6年目です。初期臨床研修を市中病院で修了し、卒後3年目に慶應義塾大学内科専修医として内科全科をローテーションしました。呼吸器内科をローテーションした際に医局の雰囲気が良かったこと、また4年目に出張した関連病院で素晴らしい呼吸器内科の指導医の先生に出会えたことがきっかけで、卒後5年目に呼吸器内科に入局しました。医局の同期には様々な大学出身者がおり、またすでに呼吸器内科医として経験を積んでいた者もいますが、お互いに切磋琢磨し合いながら研鑽を積んでいます。医局は和気藹々とした雰囲気で、忙しくも楽しく仕事ができる環境です。私が呼吸器内科入局をお勧めする理由は次の3つです。

- ①臨床：基礎研究のテーマに縛られることなく呼吸器内科一般臨床を全て経験できます。私自身の研究テーマは気管支喘息ですが、病棟では肺癌、びまん性肺疾患、COPD、肺炎と様々な疾患の患者さんを担当します。
- ②研究：学生時代に基礎研究の経験がなくても、経験豊富な指導医の先生方に教わりながら始めることができます。また様々な研究会や学会に参加、発表する機会もあります。
- ③教育：臨床カンファレンスや指導医の先生方からのレクチャーといった呼吸器内科医としてのスキルアップの機会があります。さらに、自分が教育を受けるだけでなくローテーションしている研修医や内科専修医の先生たちに対するレクチャーを担当することもあります。後輩に指導することも自分自身の知識を整理する機会にもなります。

最後に、皆さんの入局を心よりお待ちしております。

関連病院の先生からのメッセージ

川崎市立川崎病院 田中 希宇人
(慶應義塾大学卒 平成21年度入局)

私は2005年に慶應義塾大学を卒業し、慶應大学での研修とけいゆう病院での内科出向を経て2009年に呼吸器内科に入局しました。

■なぜ「慶應の呼吸器内科」か

一言でいえば、慶應の呼吸器内科の先生方はみんな尊敬できる「いい先生」だからです。呼吸器内科がカバーする疾患は肺癌、肺炎、COPDや喘息、慢性呼吸不全、睡眠時無呼吸など非常に幅広く、急性期も慢性期もあり、患者層は多種多様です。業務時間は長く、重症患者も多いため、決してラクな科ではありませんが、呼吸器疾患や分野に興味のある呼吸器内科の諸先輩方は、研修医の頃の自分には光って映りました。「こんな先生たちと一緒に働きたい!」と思ったのが入局のきっかけです。どんな患者さんにも全力で立ち向かい、同僚が困っている時に助け合っていますので、後輩であってもみんな尊敬しますし逆に教えてもらうこともあります。

■呼吸器内科の「臨床」

病棟業務は複数のチームに分かれて患者を担当し、1つのチームにチーフ、サブチーフ、オーベン、研修医となっています。患者を1人だけで見ることはありません。スタッフの先生方は各分野をリードする先生方ばかりです。学年の近い先生もいることで助け合いながら患者さんと一緒に病気と闘っていきます。

呼吸器内科を考えている先生は一度相談しましょう。実際の大学での医療の現場と呼吸器内科の仲間たちを実際見に来て下さい。

関連病院の先生からのメッセージ

東京医療センター 若木 美佐

(浜松医科大学卒 平成16年度入局)

私が慶應の呼吸器内科に決めたのは、医局の雰囲気や先輩がたの人柄に惹かれたことが一番の理由でした。呼吸器内科は、疾患のバリエーションが豊富で、それを身体所見や検査から絞り込んでいく診断学としての面白さや、急性期から慢性期まで幅広く携われることなど、興味はむしろ入局してから広がり、深まったように思います。

私が入局して間もなく、最初の出産例になってしまったとき、同僚の先生たちには大きなしわ寄せがいき、復帰にあたってはバックアップ体制の検討などのために何度もスタッフミーティングを開いて頂きました。多くの先生方、家族にも支えられ、2007年現在の職場である東京医療センターに赴任いたしました。その後二人目を出産しましたが、理解ある上司や同僚のもとで、やりがいを感じ仕事を続けられていることを本当に感謝しています。

慶應の呼吸器内科では、その後多くの女性医師が出産をして復帰されています。呼吸器内科のニーズは増えるばかりで、急性期医療や癌治療だけでなく、禁煙治療や睡眠時無呼吸症候群、終末期・緩和医療など育児と両立をしながら専門性を発揮できる場はいくらでもあります。ぜひこの忙しくも楽しい医局で一緒に頑張ってみませんか。

留学中の先輩からのメッセージ

Boston University School of Medicine

鎌田 浩史（慶應義塾大学卒 平成19年度入局）

私は2012年10月より、ボストン大学医学部の呼吸器センター(Pulmonary Center, Boston University School of Medicine)に留学させて頂いております。米国の研究室では主に気道上皮の自然免疫機構の解明の研究に従事しております。

留学前は、医師5年目に慶應呼吸器内科に入局し、4年間、大学病院での臨床および大学院で基礎研究を学び、その後都内の急性期病院に勤務しておりました。渡米前に勤務していた病院では、肺腫瘍、喘息、COPDとならび呼吸器感染症の患者さんも多く、現在の基礎研究にはその当時の経験を頭に思い浮かべながら、やりがいを持って臨むことができます。

呼吸器内科の領域は、肺線維症、アレルギー、感染症、他の炎症性疾患だけでなく腫瘍も存在し、まだまだ診断・治療は発展途上の部分もあり非常に奥が深いと感じています。そして、慶應呼吸器内科は臨床および研究活動のどちらにも重きを置き、とてもバランスのとれた素晴らしい科であると思います。

呼吸器に興味をお持ちの先生方、是非、慶應呼吸器内科と一緒に働きましょう。

留学中の先輩からのメッセージ

University of Colorado

仲地 一郎（北海道大学卒 平成15年度入局）

私は2009年よりアメリカ・コロラド大学に研究留学しております。こちらでは主に肺癌や前癌病変の細胞遺伝学的な解析をしています。日本を離れ研究留学生として働き始めた当初、以前とは比べ物にならないくらい実に多くの分野の研究者や医師、そしてテクニシャンなどに関わって仕事をすることにより戸惑いがありました。英語もままならないことからやや閉鎖的な気持ちになることが多かったです。ですが、日本では諸先輩方の指導の下で、実は臨床も研究も両立して多くのことを学んできていたことにある時気づき、その後仕事を続けていく上で大きな自信にもなりました。

振り返ってみると慶應呼吸器内科は、臨床も研究も重視しバランスよく学んでいく“スピリッツ”が、代々受け継がれている貴重な教室であると思います。アメリカにいても各分野の専門家とも十分理解しあえる基礎を十分に身につけられると思います。多種多様な呼吸器疾患を是非一緒に学んでいきましょう！



皆さんの入局を心からお待ちしております。

連絡先

研修担当：田坂定智

E-mail: tasaka@cpnet.med.keio.ac.jp

tel: 03-3353-1211 (内線61429)